仁平義明編『嘘の臨床・嘘の現場』（至文堂，「現代のエスプリ」481：2007）

コラム

抑圧という自己欺瞞はあるか

仁平義明

抑圧のエビデンス

精神分析理論は、エビデンスの無い思想だという考えがある。

精神分析理論のうちでも、「抑圧」（独 Verdrängung；英 repression）は、もし抑圧というものが存在しないことになれば理論の存立が危うくなるような、根幹になる概念である。

抑圧の狭義の定義では、たとえば「個体が、ある欲動と結合した表象（思考、イメージ、記憶）を無意識のなかに押し戻すとか、無意識に留めようとする精神作用。抑圧は、欲動の充足―それ自身は快感を与えるものである―が他の欲求にたいして不快を誘発するおそれのある場合に、生じる」（ラプランシュ＆ポンタリス編 一九七七 村上 仁監訳『精神分析用語辞典』みすず書房 一九七七）というのは、コンパクトな定義の一例である。抑圧の本義は、ある意味では快の要素を持っているが、自分が身につけた価値基準からすればゆるされない表象の抑圧である。

しかし、広義には、不快・苦痛な記憶表象は想起されなくなる、という現象までを抑圧に含めることも不可能ではないし、じっさいに抑圧はそのような意味でも使用されている。

抑圧という防衛機制は、苦痛な体験は無かったことにする一種の自己欺瞞だといえるが、抑圧は現実に存在するのだろうか。苦痛な経験が選択的に想起されなくなるという証拠はあるのだろうか。

アメリカ、アリゾナ大学の心理学者グリーンフットたち[1]（二〇〇五）は、母親のパートナー（実父、義父、あるいは母親の恋人）から虐待を受けた子どもたちの記憶を六年後まで追跡調査した。この研究では、ひどい虐待を受けた経験ほど六年後の記憶からは消えているという逆説的な現象が明らかにされた。

調査対象者は、パートナーから虐待を受けてシェルターに逃れていた母子など。子どもは、一五三人。最初の調査時点で子どもたちの平均年齢は九歳、六年後に再び記憶を確認したときの年齢は平均十五歳だった。最初の九歳のとき、子どもが母親のパートナーからどんな虐待を受けたかが詳細に調べられ、母親からも裏づけをとり確認がされた。虐待は、因子分析によって、（1）相対的に軽い虐待（突き飛ばす、平手打ちする、物で

たたくなど）と、（2）エスカレートした、酷い虐待（蹴る、拳で殴る、火を押し付けて火傷をさせるなど）に分類されている。

軽い虐待は思い出せるのに酷い虐待は思い出せない

六年後、十五歳になった子どもたちは再び面接を受けた。調査では、六年前にどんな虐待を受けたかを自発的に思い出してもらうだけでなく、物でたたく、拳で殴るなど、すべての具体的な項目をあげて、六年前にそのような虐待を経験したかどうか再確認が行われた。結果は、驚くべきものだった。

九歳時に酷い虐待を受けていたのは二二人の子どもたちだったが、六年後に比較的軽い虐待の経験を思い出せなかった者は、そのうちわずかに一人（五％）だった。物でたたかれた程度の経験は覚えていたのである。ところが、拳で殴る、火を押し付けてやけどをさせるなど、エスカレートした酷い虐待経験は、自発的にでも、具体的にこのようなことがなかったかと項目を質問された場合でも、ほとんど（八二％）の子どもは思い出せなかった。

パートナーが母親に行った虐待を目撃した子どもの記憶にも、同じような傾向がみられた。九歳時に母親に対する酷い虐待を目撃していた子どもは七五人だったが、六年後に軽い虐待を思い出せなかったのは、そのうちの三六％だった。これに対して、エスカレートした酷い虐待があったことを思い出せなかった割合は、ずっと多く、五六％だった。

自分が受けた虐待でも、母親が受けた虐待でも、トラウマティックな虐待経験ほど思い出せない割合が高かったのである。

この現象は、フロイトが仮定した抑圧という防衛機制が存在する可能性を思わせる。

抑圧という心理的メカニズムはなぜ進化したか

虐待経験の忘却は、他者（母親のパートナー）が自分に向けた悪意ある意図の忘却だともいえる。ネスとロイド[2]（一九九三）は、自分ではなく他者の利己的で邪悪な意図なのに、抑圧がなぜ必要になるのか、その理由についてこう考えている。力関係で弱い立場にある者にとっては、強い力を持った悪意ある相手の意図を明らかにすることは、相手を非難し相手の社会的立場を危うくさせる結果になる。しかし長期的には、強い相手への非難は、次には相手から自分への反撃になって返ってくるおそれがある。それを避けるためには、相手の悪意を自分の心の中でも無かったことにした方が安全だというのである。この考え方は、抑圧という防衛機制がなぜ進化したかを説明し

ようとする試みの一つである。

ネスたちの論の当否は別にして、酷いトラウマほど思い出せないことが確実にあるのなら、これは最も大きな自己欺瞞だろう。

グリーンフットたちの研究結果には、いくつか注意が必要である。一つは、体験の忘却は虐待という現象だけに特異的なものではなかったことである。彼女たちは、虐待以外のこの子たちの経験の忘却も調べている。引越しや家族の死（ときには自殺未遂）、母親の転職など多数の出来事である。こうした出来事も、六年後には四〇％から八〇％の子どもたちが覚えていなかった。ある意味でトラウマとなる出来事も、ここには含まれている。抑圧という現象の有無を論じるには、より広い体験についての検討が必要だろう。もう一つは、子どもたちが報告しなかったことをすべて想起もされなかったと考えてよいかどうか、忘却は表面的なものだったのではないかという問題である。思い出せたのに口にしたくないために報告しなかった可能性も完全には否定できない。さらに、想起されていないとすれば、それは記憶から消去されているのか、フロイトが抑圧という概念で想定しているように想起されない記憶として存在するのかは、別な追跡研究、生理的指標や他の工夫された測定法を用いた研究が必要だろう。

認知心理学者ノーマン（一九八二）[3]は、フロイトについて、こう述べている。

「フロイト〔Freud〕は人間の思考の幾つかの側面を説明しようとしたが、彼の試みは成功しなかった。フロイトの理論は現在の認知心理学者が評価する以上に正しかったのではないかと私は考える（現代の科学的心理学ではフロイトは完全に無視されている）。また私は現在の精神分析理論の研究者が主張しているよりもはるかに正しくないとも考える」（富田訳　三九頁　一九八四）。

〔引用・参考文献〕

（1）Greenhoot, A. F., McCloskey, L., & Glisky, E. 2005 A longitudinal study of adolescents' recollection of family violence. *Applied Cognitive Psychology*, 19, 719–743.

（2）Nesse, R. M. & Lloyd, A. T. 1992 The evolution of psychodynamic Mechanisms. J. H. Barkow, L. Cosmides, J. Tooby (Eds.) *The adapted mind : Evolutionary psychology and the generation of culture*. Oxford University Press. 601–624.

（3）Norman, D. A. 1982 *Learning and memory*. W. H. Freeman and Company.
（富田達彦訳『認知心理学入門―学習と記憶―』誠信書房　一九八四）

〔にへい・よしあき　東北大学大学院文学研究科心理学講座教授〕